

— 家庭用機械編機による編地 —

文化女大家政 ○大倉洋子 堤もゆる 成瀬信子

目的 毛糸で編地を編む場合、手編か機械編か、また、毛糸や編構成などによって、編地としての外観的性能とその物性が異なってくる。そこで編地の構成要因によって、どのような性能が与えられるか、基礎的な測定を行なった。今回は家庭用機械による編地で、保健的性能を中心として報告する。

方法 極細、中細、並太の3種の太さの毛糸を用いて家庭用機械でメリヤス編、ガーター編、ゴム編(2種)、すかし編組織を編んだ。極細毛糸については1本どり、2本どり、3本どりについて、また、編目ダイヤルの調整は糸の太さの指示に合わせて編んだ。糸の色はいずれも近似したイエローブラウンとし、製編後の各構成要因と保健的性能を測定した。また、条件の異なる編地の外観的なイメージと測定との対応を見た。

結果 極細1本どり、2本どり、3本どりで各々編んだ編地の構成および保健衛生的な性能の差は等間隔ではなく、1本どりと2本どりの差は2本どりと3本どりの差より大きい。中細3本どりは並太と見かけ上の太さは同じだがその構成および性能はかなり異なり、含気性が小さい3本どりの方が並太で編んだ場合より薄く重い。また、通気性は小で、性能のばらつきが小さい。保温性は有風時の冷却法は並太の保温率が小さい傾向である。構成法の異なる編地に対するイメージの方が物性値の差より、編地としての必要性や好みを支配していると思われる。